

学位論文要約
Extended Summary in Lieu of the Full Text of a Doctoral Thesis

甲第 995 号

氏 名： 吉 村 博
Full Name Hiroshi Yoshimura

学位論文題目： 卒後研修入職試験におけるマルチプル・ミニ面接法：候補者に対する‘過去の実際の行動に焦点を当てた質問’と‘仮想の状況への対応に焦点を当てた質問’の信頼性・受容性の比較

Thesis Title Past-behavioural versus situational questions in a postgraduate admissions multiple mini-interview: a reliability and acceptability comparison

学位論文要約：
Summary of Thesis

医学部入学試験、卒後臨床研修選抜試験等における面接試験は、1つの面接室において面接官が多様な質問を行い、候補者の印象評価を行う Single-Station Personal Interview (SSPI) が一般的であるが、SSPIの信頼性や受容性は疑問視されている。Multiple Mini-Interview (MMI) は、入学あるいは入職後に発揮してほしい能力に関する質問を事前設定し、その質問数に応じた3~12ステーションを設け、面接官が1つのステーションにつき事前設定された1つの質問だけを候補者に行い、評価基準が明記された評価票を用いて採点する構造化面接法であり、信頼性と受容性が確立され、態度・人間性の評価法として普及しつつある。従来、MMIで用いる質問法としては、ジレンマを伴う仮想状況を設定し、その状況で候補者がどう行動するかを問う Situational Question (SQ) が主に用いられ、その状況で候補者が過去実際にどう行動したかを問う Past-Behavioural Question (PBQ) は普及していないが、医師以外の職業における SSPI 形式の採用面接では、PBQ は SQ と同等以上の信頼性と予測妥当性が証明されている。今回我々は、卒後臨床研修選抜試験の MMI においても、PBQ が SQ と同等以上の信頼性と受容性を有するかどうかを検討した。

【対象と方法】

内科・外科・救命救急科の専門研修入職候補者26名（男性20名、女性6名）に対してMMIを実施し、評価の信頼性と受容性を分析した。MMIは5ステーションとし、各2名の面接官を配置し、候補者は5ステーションをローテーションした。各ステーションのテーマは、Accreditation Council for Graduate Medical Education (ACGME) が定めた医師が修得すべき6つの能力（大項目）のうち、“医学知識”以外の“患者中心のケア”、“診療の実践を通しての学びと改善”、“対人関係とコミュニケーション・スキル”、“プロフェッショナリズム”、“医療の社会性を配慮した診療実践”とし、各大項目に含まれる小項目からPBQ用、SQ用の質問各1つを作成し、インタビューガイドを用意して事前に面接官トレーニングをおこなった。質問時間はPBQ 5分、SQ 5分とし、面接官は役割を交代しながら、全候補者に同じPBQとSQを行った。評価は3つの規準「コミュニケーション・スキル」「行動表現の信憑性」「当院での修練可能度」について5段階のルーブリックを作成し用いた。面接官はお互い協議せず独立して採点した。PBQ群、SQ群それぞれの結果について、3つの評価規準を固定因子とし、候補者・面接官・ステーションを変数とした多変量一般化可能性理論にて信頼性を分析した。またMMI終了後に候補者と面接官双方に本面接法の受容性について4段階リッカート・スケールと自由記載法を用いた質問紙法で量的・質的に分析した。

【結果】

多変量一般化可能性研究 (G-study) により、PBQ 群および SQ 群の信頼性係数はそれぞれ 0.822, 0.821 と同等に高いこと、決定研究 (D-study) により、1人の面接官で MMI を行った場合 7ステーションを設定すれば信頼度係数が 0.8 を上回ることが明らかとなった。また評価規準に関しては「コミュニケーション・ス

キル」の分散が最も小さく、ステーション間、評価者間の分散も PBQ, SQ とともに比較的小さかった。MMI の事後に行った質問紙では、候補者の 62%が自分の能力を表現できたと考え、面接官の 67%が自分の評価に満足していた。また候補者・面接官全員が PBQ・SQ 双方を含む本 MMI が従来の SSPI に比べて正当な方法と認識していた。候補者は SQ をより好んで受け止めていたが、一方、逆に面接官は PBQ の方をより好意的にうけとめていた。また 70%を超える候補者・面接官が MMI には PBQ・SQ の双方を用いるべきだと自由記載で述べた。

【考察】

本研究において PBQ・SQ とともに信頼性係数が 0.8 を超え、同等に良好な信頼性が証明された。MMI におけるこのような比較研究は今までに報告例がなく、より適切な人材選抜を行うための基礎データが得られた。従来、MMI の十分な信頼性確保（信頼性係数 0.8<）のためには、面接官 1 名で行うステーションが 10 以上必要とされてきたが、今回の MMI では PBQ・SQ とともに面接官 2 名で 5 ステーション、または面接官 1 名で 7 ステーションと、従来の報告より少ないステーション数で十分な信頼性が得られた。これは評価する医師の能力（ACGME の枠組み）・質問項目・評価法の統一（ループリック作成）、面接官のトレーニングなど、MMI の構造化が強化されて評定者間信頼性がより改善されたためと考えられる。受容性に関しても候補者・面接官ともに SQ・PBQ 双方に対して良好な結果が得られたが、候補者にとって SQ がより好まれる傾向を示したのは、PBQ に答えるためにはより多くの臨床経験が必要であったからと推測される。今後は、本 MMI で採用した専攻医が実際の修練の場でどのようなパフォーマンスを示し、人材として育成されるか（予測妥当性）を検証してゆく必要がある。

【結論】

Multiple Mini Interview（MMI）による面接試験を専門医研修入職試験に採用し、評価する医師の能力・質問項目・評価法を統一して構造化することにより、高い信頼性と受容性が得られることを明らかにした。